

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第6，7回）2022年11月号第5回から続く）

アフマド鈴木紘司
(地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員)

(本論に掲載したクルアーンの日本語訳は著者の翻訳による。)

第6回

1, マッカ中期 = 理性に働きかける啓示の数々

マッカ中期の啓示は「第80章：眉をひそめ」から「第6章：家畜」まで32章となります。ムハンマドが唯一神を説く宣教活動を積極的に展開した時期であり、宣教に力を入れれば入れるほど、カアバ聖殿の偶像を保護するクライシュ族の反発が強まりました。入信者への迫害が烈しさを増し、信徒の一部は海を隔てた“エチオピアへの移住”を余儀なくされます。キリスト教を奉じるエチオピア国王に読み聞かせたのが、「第19章：マルヤム（マリア）」でした。それに続く「第20章：ター・ハー」は後にイスラーム世界の指導者となる2代目正統カリフ、ウマル・イブン・ハッターブが劇的な入信をするきっかけとなった章として知られています。中期の啓示章の幾つかを選んで読んでいきましょう。

「第80章：眉をひそめ（全42節）」 = 預言者でも叱責される

その日、使徒ムハンマドはマッカの名士達を集め、アッラーの道について熱心に説教をしていました。その場所へ目の不自由な男が入り来て、使徒の話しを遮り、様々な質問を浴びせ掛けたのです。男は名士達がいる状況を把握できず、説教の妨げになるのも介せず余りにもしつこいので、使徒は思わず眉をひそめて顔をそむけました。この使徒の態度につき御主からの叱責が下されたのです。

- [1. 眉をひそめ、そして顔をそむけた。
2. 眼の不自由な人が来たことで。
3. どうして汝にわかるか、彼が清められるのを。
4. あるいは彼が思念し、訓戒が彼を益することを。
5. だが満ち足りた者については、
6. 汝はそれに対し応える。
7. しかもその者が清められなくとも汝のせいではない。
8. だが急ぎ求めて汝のもとへ来る人について、
9. しかも彼は主を畏れている。
10. だが汝はそれにつき、おろそかにした。
11. 断じて。本当にそれはお諭しである。・・・(第80章、1~11節)]

使徒の立場であるムハンマドがその男を疎んずるとは何事か、彼こそが清められる魂の持主かもしれない。それなのに権力を持ち、財産に恵まれ、満ち足りた不信者らに入信を勧め、そうでない人々をなおざりにすることを叱られたのです。信仰を必要として求め来る人にこそ配

慮すべきであり、御主を心から畏れる人を大事にしなければなりません。御主アッラーは弱者も富者も貧者も貴人も老若男女もすべての人を平等に扱うように命じます。断じてこのような配慮に欠けた振る舞いをしてはならないと、平等を教える訓戒でした。

2, 第97章：天命（全5節）＝ 啓示が降臨する過程を示す

クルアーンは、預言者ムハンマドの上に23年間にわたり、分割して下されました。本章は啓示が「天命の夜」に降臨したこと、それがどのような過程を辿るのかを説明します。

- [1. まことに我は天命の夜にそれを降臨させた。
- 2. そして天命の夜とは何か、どうやって知る。
- 3. 天命の夜は千の月よりも優る。
- 4. 天使たちと聖霊がその中で降臨する、すべての事柄に御主の許可を得て。
- 5. 平安あれ、それは黎明の現れる頃まで。]

クルアーンの最初の言葉はラマダーン月（イスラーム暦、第9月）の「天命の夜(Lailah-al-Qadr)」に降り、この夜は“祝福される夜”となりました。注釈では、七つの天界の最上階には天地の秘儀を記した「保存の書板」が安置されており、そこからラマダーン月の夜に最下層の天にこの啓示を保管するという「尊い館」へ降されます。そこが星々の輝く場所であり、ここから地上に住む預言者ムハンマドへ天使が必要に応じて23年間にわたり分割して運び下ろすとされます。同じ内容の典拠は「まことに我らはそれを祝福の夜に下した（第44章；煙、3節）」及び、「ラマダーン月こそにクルアーンが降された（第2章：雌牛 185節）」です。従って啓示の言葉は、既に原本に記録され決定済みだからこそ、クルアーンの内容の変更や修正が不可能という理由となります。

天命の夜がその他の千の月よりも優るのは、この夜の恩恵に満ちた崇拝行為で祝福されるからです。天使ジブリール（ガブリエル）を筆頭にして多くの天使たちが地上へ降臨し、安らぎは日没から暁の訪れるまで続きます。「天命の夜」が正確に何時か諸説ありますが、①毎年のラマダーン月27日、②ラマダーン月29日、③ラマダーン月最後の10日間の奇数日(23～29日)、などが知られています。

3, 「第91章：太陽（全15節）」＝ 大自然の存在物と現象は神兆である

宇宙に存在する被造物と現象の7つ（太陽、月、昼、夜、天、地、魂）にかけて誓います。

- [1. 太陽とその輝きにかけて
- 2. 月がそれに従うときにかけて
- 3. 昼がそれで照らすときにかけて
- 4. 夜がそれを覆うときにかけて
- 5. 大空とそれを建てた御方にかけて
- 6. 大地とそれを広げた御方にかけて
- 7. 魂とそれを整えた御方にかけて。
- 8. 悪徳と敬虔を明示する御方に。
- 9. たしかに清める人は栄える。
- 10. だがたしかに汚す者は滅びる。・・・（第91章、1～10節）]

昇る太陽（シャムス）により、朝の輝きが満ち溢れ、全生命に活力を与えます。太陽に続く光源の月（カマル）は、夜を照らして、その満ち欠けで日付を教示します。事物が明らかとなる昼が訪れ、それらを覆い隠す夜に交代して毎日を繰り返します。空を天体と共に打ち建て、大地を平らに広げて、魂と生命を整えたのは御主アッラーの御業です。こうした被造物を展開した創造主にかけて誓うのです。御主は人間の魂に敬信と悪徳を明らかに分与されました。その結果、自らの魂を清める人は栄え、自分の魂を汚す者は滅びます。

次いでサムード族物語の訓戒となり、サムード族は遣わされた使徒サーリフを嘘つきとして、贈られた神兆の牝ラクダの膝の腱を切り殺してしまい、彼等は壊滅させられました。末路を怖れない者には必ず天罰が下されるとの例えであり、クルアーンが警告の書である側面を明示します。

4, 「第85章：星座（全22節）」 = 時間の経過により運命は変わりゆく

星座（ブルージュ）は、天空にあって季節ごとに位置を変えて現われ、またその姿を隠していきます。本章は、イエメンの古都ナジュラーンで迫害にあい、殺されたキリスト教徒が主題であり、信仰のため時には犠牲を払う場合が起きることを教えます。

- [1. 星座をもつ天空にかけて。
2. 約束されたその日にかけて。
3. 証言するものと立証されるものにかけて。
4. 溝穴にいた人々は殺された。
5. 燃料を加えた火で。
6. そのとき彼らはその傍に座していた。
7. そして彼らは信者たちへなしたことを見物していた。
8. だが彼らが迫害したのも、偉大で讃美するアッラーを信じたことだけのため。
9. 天と地の大権を有する御方。アッラーはすべてのことを見ておられる。
10. 本当にこの者らは、信仰する男性と女性を迫害し、その後に後悔もなかった。それで彼らには地獄の罰がある。また彼らには火刑の罰がある。
11. 本当にこの人たちは信仰して善行をした。彼たちには川がその下を流れる楽園がある。これが最大の成功である。・・・（第85章、1~11節）]

四季により星々が形を作り、色々な星座を輝かせる天空にかけて誓います。星座は、①太陽の軌道に沿う黄道12宮、②月の28宮を指しますが、その他に、③天使の見張人を置く望楼、④ 天空の城砦、との注釈もあります。約束された復活の日にかけて誓い、“証言するもの、されるもの”に関して多くの解釈があり、① 証言するのは「悪行を見ていた人たち」で、されるのは「悪行を犯した首謀者」の説。② 証言するのは「使徒たち」で、されるものが「その民」、との注釈。③ 証言するのは「使徒ムハンマド」で、されるのが「復活」との説。④ 証言するのは「金曜日」の集合礼拝で、証言されるのが巡礼月第9日「アラファートの日」との説です。「溝穴に落とされた人々」とは改宗しなかったキリスト教徒のことで、ユダヤ教に入信したイエメンのヒムヤル王国最後の王が、キリスト信者達を火が燃え盛る溝穴へと突き落としたという実話です。こうした不当な仕打ちをして悔い改めない者には、地獄で火刑の処罰が待っています。なお、イエメンにおけるキリスト教徒迫害の情報がビザンツ皇帝に伝わり、信者た

ちを救援する命令がエチオピア王に指示されて、エチオピア軍のイエメン進攻となり、第105章の象軍を率いた軍勢がマッカ遠征する要因となりました。

5, 「第101章：強打音（全11節）」 = 復活の日の恐怖を表現する

章名は冒頭にある「強打音（カーリア）」から採っており、30番目に下された章です。

- [1. この強打音。
- 2. この強打音とは何か。
- 3. そして何がこの強打音かを、どうやって知る。
- 4. その日、人々は飛ばされた蛾のようになる。
- 5. そして山々は梳かれた羊毛のようになる。
- 6. それで誰でもその秤が重く下がれば、
- 7. それで彼は満足する生活に。
- 8. また誰でもその秤が軽く上がれば、
- 9. 彼の母体は奈落である。
- 10. そしてそれが何かをどうやって知る。
- 11. 灼熱の業火である。]

強く連打する恐ろしい音は何か、強打音が何かをどう知るかという疑問文で始まります。「強打音（カーリア）」とは、強く叩いた大音響が湧き起こる復活の日の異名であり、その恐ろしい日に人々は墓から出され、ちょうど虫の蛾が飛ばされるように空中に漂う状況となります。同様に堅固な山々が崩れ去り、まるで梳いた羊毛のように行方も定まらず飛散します。人々は現世の行為により分けられて、最後の審判の秤が善行により重く下がった人には、満足する暮らしが楽園で得られます。反対に悪行が多く審判の秤が軽い者には灼熱の業火が満ちた奈落の底が最後に住み付く場所となるのです。

「第75章：復活（全40節）」も復活の日の恐怖を具体的に説明する章です。

- [1. 復活の日にかけて我は誓う。
- 2. そして、自責する魂にかけて我は誓う。
- 3. 人間というのはその骨を我が集めないと考えるのか。
- 4. しかり、その指先まで我はそろえるのが可能である。
- 5. だが人間というのはその先までも罪を犯すのを望んでいる。
- 6. 訊ねる。「復活の日はいつなのか」と。
- 7. ついに眼が眩むとき、
- 8. そして月は光を失う。
- 9. そして太陽と月が一つに合わせられる。
-
- 16. 汝の舌をそんなに急がせて動かしてはならない。
- 17. まことに我のつとめはそれを集め、それを読ませること。
- 18. だからそれを我が読ませるときは、その読誦に従うがよい。
- 19. それからまことに我のつとめは、それを解き明かすこと。

．．．．．]

「復活の日」にかけて誓い、「自責する魂」に誓う、の意味は善行をもっと増やせなかったか、悪い事を少なめにできなかったかと反省することです。復活の日には骨だけでなく指先の爪や指紋を含めて元通りに復活するとされます。しかし多くの人間はその完全な復活を信じないで、嘲笑しながら復活の日はいつ来るのかと尋ねます。閃光により目が眩み、月は光を失い、太陽と月が一つになる終焉が必ず将来、訪れるというのです。大変化をもたらす復活の日には避難場所がありません。アッラーの御許へ帰され、現世でした全行為が明らかにされます。

「16節」以下は、クルアーン朗誦をいかにするか、使徒ムハンマドへの指導です。天使ジブリールが啓示を携えて来たときには、その言葉を良く聞いてから胸に収めて、それを声に出して朗誦し、明確に理解することを求められました。舌を早く動かしてはならず、天使が告げ終えるまで待ち、それを正確に復唱しなければなりません。最初の頃、ムハンマドは啓示を忘れずに記憶しようとする余り、舌を早く動かしましたが、彼の詠み方は次第に洗練されていったとされます。そして、現在の「クルアーン朗唱」が成立したのです。

6, 「第77章：送られるもの (全50節)」 = 宣誓の形式を採る文章である

誓言文の形式を取る「送られるもの (ムルサラート)」に3つの解釈があります。①風であり、主の命令で次々に送られる。②天使であり、主の命令で続いて派遣される。③使徒であり、アッラーから次々に遣わされる。

- [1. 続々と送られるものにかけて。
2. また烈しく吹くものにかけて。
3. 散らし振り撒くものにかけて。
4. また分割し区分けるものにかけて。
5. また訓戒を持ち来るものにかけて。
6. 赦すため、あるいは戒めのため。
7. だが約束されたことは必ず起る。
8. そして星々が光を消されるとき、
9. そして天空が裂け割れるとき、
10. そして山々が粉碎されるとき、
11. そして使徒たちが定刻に集められるとき、
12. いつの日まで延ばされるのか。
13. 裁きの日まで。
14. そして何で知る、何が裁きの日かを。
15. 嘘とした者らに、その日、災いあれ。．．． (第77章、1~11節)]

強く吹く風に誓い、まき散らし振りしきる雨にかけて、真理と虚偽、合法と非法などを峻別するクルアーンにかけて、啓示を送り届ける天使にかけて、誓います。訓戒と諭しは人々を赦すため、戒めるために送られました。それで「約束された復活の日は確実に起きる」の文節が誓言に対する応答文です。

「8節」から復活が起こるときの状況説明となります。星々が光を消して輝きを失い、天空が

二つに裂け割れ、山々が粉碎され、使徒たちが定刻に集められます。その時刻は裁きの日までと限定されています。裁きの日にはそれまで嘘としてきた者に大きな災禍が降りかかるのです。

7、「第50章：カーフ 全45節」＝ 文字自体に、深い秘密がある

アラビア文字が、冒頭に1文字だけ置かれているのは、既述の「第68章：筆、ヌーン(N)」と「第38章：「サード(S)」と「第50章：カーフ(Q)」の3章だけです。そして冒頭節に置かれた1文字「Q(カーフ)」が章の名前となったのが「第38章：S(サード)」の二つの章だけで、両章には形式と内容で類似点が多く見られ、章の冒頭にきて「クルアーンにかけて誓う」との宣誓文になっています。

特に「カーフ(Q)」の解釈として、①大地を取り囲む山の名前、②アッラーの名称の一つ、③クルアーンの名前などがあります。

- [1. カーフ。栄光のクルアーンにかけて。
2. いや、彼らは驚いた、彼らの中から警告する人が現われたことに。そこで信仰なき者らは言った。「これは不思議なことである」。
..... (第50章、1～2節)]

クライシュ族の不信者らは自分たちの中から使徒としてムハンマドが現われたことを疑いますが、別に何の不思議はありません。過去にも同じ言語、言葉を話す同族から、説明ができる人物を使徒に派遣して来ました。

- [1. サード。訓戒に満つクルアーンにかけて。
2. いや、不信の者らは、傲慢と分裂の中にいる。
3. 幾つの世代を彼ら以前に、我が滅ぼしてきたか。そこで彼らは叫ぶが、もう避けることのできない時であった。
..... (第38章、1～3節)]

このように謎に包まれた神秘的なアラビア文字(アルファベット)が冒頭に置かれた章が、クルアーン全114章のうちで計29章あります。この正式名称は、独立した文字が並ぶことから、「独立形文字」、或いは、各章を開く作用をするとの意味で「開章文字」と呼びますが、通称は“神秘文字”と呼称しています。この文字が深遠な真理を象徴するのは確かなのですが、何を意味するのかは、現在まで不明とされ、結論が出ていません。

実際に神秘文字が章名となっているのは、上記の2章に加えて、第20章：ター・ハー(T・H)、第36章：ヤー・シーン(Y・S)の、4章だけですが、総計29章の冒頭に置かれており、構成は1～5文字で、下記のように“14類型”があります。

- 1字構成＝「S(サード)」、「Q(カーフ)」、「N(ヌーン)」の3章だけです。
- 2字構成＝「H・M(ハー・ミーム)」と第40～46章までの連続した7章です。中でも第42章だけに、「A・S・Q(アイン・シーン・カーフ)」と付加があります。
- そして第20章、第27章の「T・S(ター・シーン)と第36章の計10章です。
- 3字構成＝「A・L・M(アルフ・ラーム・ミーム)は、第2章、第3章、第29～32章までの小計6章。「A・L・R(アルフ・ラーム・ラー)が、第10～12章と第14、15

章の小計5章。「T・S・M (ター・シーン・ミーム)」の第26章と第28章の小計2章となり、合計13の章があります。

4字構成 = 「A・L・M・S (アリフ・ラーム・ミーム・サード) 第7章「A・L・M・R (アリフ・ラーム・ミーム・ラー) 第13章の2章だけです。

5字構成 = 「K・H・Y・A・S (ケーフ・ハー・ヤー・アイン・サード) の第19章だけとなっています。

古今、神秘的な文字が何を意味するのか、この真意につき様々な解釈がなされてきました。

(1) 神秘文字の構成は1文字から5文字まで14類型あり、使用されたのが14文字なのでアラビア文字総計28文字の半分となります。それゆえに神秘文字は「アラビア語文法学」に基づく“文法の原理”を象徴すると解しました。なぜ各章の冒頭に置かれて何の意味なのか理由の説明にはなりませんでした。

(2) 同様に「アラビア語音韻学」に立ち、アラビア音を軟口蓋音、喉頭音、咽頭音などに分類して数えると14字であると、似たような解釈もありました。

(3) 「数字」に着目して、29の数が太陰暦1ヵ月の日数に一致すること。また神秘文字の総計が78字であることから“正しい信仰の道が78通りある”と解釈をした例もあります。アラビア語では、1～1,000の数字をアルファベット28文字に対応させた「文字数」という特別な表記があることから、この文字数を神秘文字に当てはめて、各章の内容の事柄と関連付けました。

例えば、章の中に登場する預言者の年齢を推測して割り出すこと、古代王国の存続期間を計算するなどのやり方ですが、これは単に憶測を生み出すだけでした。

結局、クルアーン研究者は常識的な判断で以下の解説をしています。

(AA) 神秘文字は「略称」の可能性が強いという説。

すなわち何かの原文があり、それを略して配列したという解釈です。しかし、何を簡略化したのかについて様々な意見が生まれ、際限がありませんでした。例を挙げれば、神秘文字Q (カーフ) が、唯一神アッラーの美称を略す、としても、全能 (カーディル: Qādir)、最強 (カーヒル: Qāhir)、神聖 (クドス: Qudus) なども挙げられます。

神秘文字A L Rを「我はアッラーであり、見るものなり」(Ana Allāh aRā) と訳しても、この種の文章は幾らでも考え付くことができます。

(BB) 誓いの役目を果たす「誓言文字」という説。

[暁にかけて、十夜にかけて、偶数と奇数にかけて、ふけゆく夜にかけて (第89章1～4節)] のように単語や句節を並べて誓う代わりに神秘文字を用いたという解釈です。文字がその章の全体に掛るという解釈ですが、それならば、なぜ29章だけに置かれており、他の章にないのか説明がつきません。

(CC) 文の冒頭を単に示すという説。

アラビア詩を吟じるときの慣習として、内容とは無関係に任意の文字を頭に置いてから本文に入る例があり、同じ形式を踏襲したとの解釈でした。

(DD) 注意を喚起する文字との説。

語り手が聴衆の注意を引き付けるために「さて、さあ」などの言葉を入れて注意喚起するように、神秘文字が“神を畏れる念を抱かせるため”これから神の言葉を語るとの注意を与えるという説明です。つまり聴衆へ啓示の重要性を認識させるために用いた修辞学上の技巧という解釈で

した。これは啓示を聞いても気に留めなかった者達が神秘文字を耳にして不思議に思い「一体何だろうと囁き合った」という伝承に基づいています。

(EE) 最後に「神学」での解釈です。神秘文字は本来、不可知なものであり、その真意はアッラー以外に知ることはできないとの理解でした。神秘の文字は、そのまま永遠に形をとどめ、クルアーン本文と同じように“永遠性を象徴する”と解しています。初代正統カリフ、アブー・バクルが語った「聖典には秘儀がある。クルアーンの秘儀は神秘文字である」との言葉にすべてが集約されています。

第7回

1, 第90章：土地（全20節）＝ 人間には苦難が多い

この「土地（バラド）」は、聖なるマッカ境域を指します。聖地マッカは「村々の母（ウム・ル・クラ）」と呼ばれ、全世界の信徒が礼拝する方角の原点である「カアバ聖殿」が存在します。

- [1. この土地にかけて誓う。
2. そして汝はこの土地で合法である。
3. 生むものと生まれたものにかけて。
4. 確かに人間を苦難の中に我は創った。
5. 彼は思うのか、本当に誰も彼に何もできないだろうと。
6. 彼は言う。「多くの財産をわしは費やした」。
7. 思うのか、本当に誰一人彼を見なかったと。・・・（第90章、1～7節）]

聖域マッカで実際に居住し、行動して“法に適った”のは預言者ムハンマドその人だけでした。マッカに足を踏み入れた人は誰でも安全を保障されますが、ムハンマドだけが例外的に聖域内での戦闘を許可されたのでした。関連の伝承 {この土地はアッラーが天地を創造された日に聖地とされた。それで復活の日まで神聖なのである。樹木を伐採してはならず流血は許されない。だが私にはこの日の何時間かを許されたが、この日以降は、昨日のように禁じられる。} {本当に唯一神アッラーの使徒の戦闘が許可された。だが言うがよい。まことにアッラーはその使徒に許されたが、そなたらには許さなかった。}

「3節」「生むものと生まれるもの」とは、預言者アブラハムとそれから生まれた子孫であるムハンマドを表し、共に聖地マッカで生活しました。

「4節」人間というのは苦勞し、困難の中で生きるように創られたとの説明です。これは分娩の苦痛から始まり、日常生活での苦勞、病気の苦しみなどあり、人生の終末の死と墓中の苦と来世の罰まで続きます。別の解釈では、人間の祖アダムが樂園から苦勞の多い地上の生活へ落とされたことを意味するとあります。

「6節」は人間の思い上がりへの叱責です。人間は自分の財産を多く使ったと互いに自慢して、気前の良さや度量の大きさを誇示します。

「7節」しかし、それら行為が、慈善のためか、良い使い方であったか、収入源の正しさはどうかなど、それら行為の始終を御主アッラーは監察しています。

自らを救う正しい道へと進むには、①信仰を持つ奴隷を解放して自由人にさせる。② 飢饉には食物を出し合い分配して、近親や孤児たち、貧しい人達へ分け与える。③ 唯一神と使徒

と復活を信じて「忍耐と慈愛」を互いにすすめ合うなどの善行に励むこと、と注釈があります。

2, 「第86章：流星 (全17節)」 = 天体にある神兆

「流星 (ターリク)」には、流れ星、天狼星シリウス、スバル星、プレイアデス(Pleiades)星団、或は、夜に訪れるもの、などの解釈があります。

- [1. 天空と流星にかけて。
2. どうやって知る、何が流星かを。
3. 輝き貫く星である。
4. 本当にすべての魂にはそれぞれに見張りがいる。
5. 考えさせるがよい、人間が何から創られたのか。
6. 噴き出した水から創られた。・・・ (第86章、1～6節)]

宣誓文から始まり、頭上に広がる天空と夜に現われて輝く星にかけて誓っています。

「流星 (ターリク)」とは、夜闇を縫って輝く星であり、悪魔を狙い撃ちする“つぶて”の役目をします。上記の宣誓に應える文が(4節)となります。

すべての人間には、御主から送られた善悪の行為を残らず書き留める「見張り (ハーフィズ)」の天使が傍らに付いています。そして、改めて人間が何から創られたのか、いかに弱小な精液から創造されたのかを認識し直すことが必要と教えます。

「第54章：月 (全55節)」同じ天体にある神兆が「月」です。預言者ムハンマドは、犠牲祭と断食明け祭の礼拝において「第50章：カーフ」と「第54章：月」を朗読しました。

- [1. その時刻は近づいた。そして月は割れた。
 2. そして、みしるしを見ても背を向けて彼らは言う。「いつもの魔術だ」。
 3. そして、嘘とし、また彼らの欲求に従う。だがすべてのことは決着する。
 4. そして、たしかにそれを抑制することの知らせは彼らに来ていた。
 5. 完璧な英知である。だが警告は役立たなかった。
 6. それゆえ汝は彼らから離れるがよい。その日、呼出し役が呼び出そう、恐ろしいことへと。
 7. 目を伏せて墓場から彼らは出て来る。まるで彼らは散らばったバツタのように。
 8. 呼出し役の方へ急ぎ行く。信仰なき者らは言う。「これは苦難の日だ」。
- ・・・ (第54章、1～8節)]

復活の時刻が近づき、現世が終わる時点で月が二つに割れて砕け散るとされます。様々な異常な前兆が最後の日を前にして起きますが、不信者はこれらの奇跡を見ても信じないで「あれはいつもの魔術」であり嘘と言い張ります。大昔から使徒を拒否したことで滅亡した物語は多くありました。天罰に関する情報はこれまでに多く来ていましたから、神兆を信じない者と議論する必要はなく、彼らから離れなさいと使徒は命じられたのです。復活の日には、天使が自ら呼び出しをかけて、恐ろしいことが必ず起きます。次いで、ノアの民の物語、フードの民、サーリフの民、ロトの民、ファラオの物語が続き、物語が終わる度に以下の文節が反復されます。

[17. そして確かにクルアーンを思念のため易しくした。さあ思念する人はいるか]と。

3, 「第7章：高壁（全206節）」 = 人生には岐路が多くある

マッカ啓示の中で節数が206節もあり、最長の章です。章名は(46節)にある「高壁」に因みます。冒頭の神秘文字は「アリフ・ラーム・ミーム」に「サード」字を足した(A L M + S)の4文字で構成され、この類型は第13章の(A L M + R)の2章だけです。

聖典クルアーンが唯一神から降臨したとの確認がなされ、啓示を信じないで滅亡した過去の都市の例を挙げて警告します。また、アダムからモーセにいたる各預言者の物語を集めているのも特長です。本章の題名「高壁（アーラーフ）」とは、天国の民と地獄の民の2集団の間にある仕切り壁をさすといひます。

[13. その日、男性偽信者と女性偽信者は信じた人たちに向かい、こう言うだろう。

「待ってくれ。お前たちの光を借りたい。言われる。「後ろへ戻るがいい。そこで光を掴むがいい」。だが彼等の間に壁ができる。それに門があり、その内側には慈悲があり、その外側には罰がある（第57章13節）]

その高い壁の上から天国と地獄の住人を見ると、各集団はその顔の印しで識別されて、輝いた白い顔が信仰者であり、汚れた黒い顔が不信者です。高い壁の上にいる人々とは、善行と悪行が半々の人で、その人々は罪が僅かでも少なければ楽園へ、罪が善を超えれば地獄へ落とされる運命にあります。それで高壁の人々は、天国の住人へ呼び掛けて挨拶をして、天国へ入るのを望みながら御主アッラーの裁定を待ちます。

[46. そして両者の間には仕切り壁があり。またその高壁の上に人間たちがいて、その標識で両者を識別する。それで楽園の住人に呼び掛ける。「平安があなたの方の上にあれ」。望んでいるがまだ彼らはそこに入っていない。（第7章46節）]

「高壁の人々」は、人生の岐路に立つ人間を象徴しています。人生は決断を迫られる場面の連続であり、決断を誤れば地獄へ転落しますし、また天国の道へも通じています。その重要局面では、知性に立脚して唯一神の導きの理解を深め、真意に合致する不退転な行動で前進することが要求されるのです。また、本章の“衣服に関する”(26節)も有名です。

[26. アダムの子孫よ、たしかにあなた方には衣服を、隠し処を覆って着飾るために与えた。だが、神を畏れる心という衣服こそが最も優れているものである。（第7章26節）]

さらに聖書（バイブル）と比較されるのが(40節)です。

[40. まことにこの者らは我のみしるしを嘘としてそれに高慢であった。彼らには天の門という門が開かれない。また楽園へ入れない。ラクダが糸を通す針穴を通り抜けるまで。このように悪者らへ我は報いる。（第7章40節）]

4, 「第36章：ヤー・シーン（全83節）」 = 信徒が最も読誦する章の一つ

「クルアーンの心臓」と称される「第36章：ヤー・シーン（Y・S）」は、イスラーム世

界での葬儀や追悼で朗読され、信徒にとり最も身近な章の一つであり、以下の伝承に依拠します。{アッラーの使徒は言われた。「すべてのものには心臓があり、クルアーンの心臓はヤー・シーン章である} {ヤー・シーン章をあなた方の死者たちに対し読みなさい}。

章名は冒頭に來たアルファベット2文字(Y・S)がそのまま使われています。これと同じ例は、「第20章：ター・ハー(T・H)」と本章の2例だけです。基本信仰である復活と審判、アッラーの一神性と創造、威力について古代の民族と大自然の摂理を挙げて強く訴えます。

- [1. ヤー(Y)・シーン(S)。
2. 英知あるクルアーンにかけて。
3. 本当に汝は使徒たちの一人である。
4. 真っ直ぐな道の上にいる。
5. 偉力の主にして慈悲の主の下されたもの。
6. 彼らの祖先が警告されなかった民へ警告するために。だが彼らは気かけない。
7. たしかに御言葉が彼等の多くの者に事実となった。だが彼らは信じない。
8. まことに我は彼らの首に枷を設け、それが顎までも。それで彼等は頭を上げたまま。
9. そして彼らの手前に障壁をおき、また背後にも障壁をおき、彼らを我が覆った。それで彼らは見えない。
10. だが彼らには同じこと、汝が警告しても警告しなくとも彼らは信じない。
11. 汝が警告するのは誰でもお諭しに従い、そして不可視の慈愛の主を畏れる人だけ。それで吉報を伝えよ、お赦しと寛大な報奨について。
12. まことに我は死者を生き返らせる。そして先に行ったこと、また彼らの足跡を記録する。そしてあらゆることを明瞭な原簿に数えてある。・・(第36章 1~12節)]

「ヤー・シーン(Y・S)」の特別解釈としては、①YSが呼掛語「おお、人間よ(Yā InSān)」の略字との説、②エチオピア語で使用される呼掛語、③“人間”の縮小形名詞「ウナイスイン(UnaYSin=小人間の意味)」を簡略にした説、④アッラーの御名の一つという説などがあります。

「2節」の「英知」とは、クルアーン聖典が包含する知恵の集成、意味の深遠さ、構成の奇跡と完璧なことを意味します。

「3節」ムハンマドは御主が遣わした使徒たちの一人であるとの確認です。

「4節」そして、唯一神信仰(タウヒード)と聖法(シャリーア)へ直結する道に立っています。

「6節」「警告されなかった民」とは祖先に使徒が遣わされてなかった「アラブの民」をさします。マッカ住民へは使徒がまだ来ておらず、それ以前の使徒はイエスであり、この間に6百年ほど長い空白期間がありました。

「7節」啓示の御言葉は多くの民に対して事実となり、天罰が下されてきたのにマッカ住民はクルアーンを信じません。

「8節」彼等は首枷をはめられて現実を直視できず、心を低くできないのです。

「9節」手前と後方に障害物が置かれ覆われたので何も見えず、使徒からの警告を信じません。

「11節」警告が役立つのは啓示を信じて教えに従い、地獄の罰を恐れる人々だけです。こうした人たちには楽園の吉報があり、罪の赦しと寛大な報奨があります。

「12節」復活の日には死者を墓中から復活させ生き返らせます。現世で行ったことの記録はす

べて原簿に残されています。

過去に使徒を遣わされた町の住人の物語、御主アッラーの神兆の数々、不信者らの行く末、信仰者と不信仰者への処遇などを述べています。

[69. そして我は彼に詩を教えなかった。それはかれに相応しくない。本当にそれが訓戒で明瞭なクルアーンに間違いない。

70. 生きる人を戒め、そして御言葉が信仰なき者らの上に実現するため。

・・・・・・ (第36章 69～70節)]

御主アッラーはムハンマドに詩を教えませんでした。詩は一定の形式をもち脚韻を踏む文体ですが、詩人の奔放な感性に基づくものに過ぎません。使徒ムハンマドに詩の教示は相応しくなく、英知と聖法の深い内容を含む「啓示」が下されたのです。眼が輝き、心が躍動する知性もつ人のための文節です。そうでない不信心の者には「必ず罰が下り、報いがある」との御言葉が将来いつか実現します。それから不信者をなじる最終部分となります。

[77. 人間は見ないのか、我が精液から創り上げたのを。だが、それなのにあからさまに反論する。

78. そして我に例えを挙げながら、自分の創造を忘れている。そして言う。「誰がその骨を朽ちてから生き返らすのか」

79. こう告げよ「それを生かすのはそれを最初に創り給うた御方。そして主はあらゆる被造物につき全知の主である。

80. その御方はあなた方のため緑色の樹木から火をつくられた。それであなた方はそれより火を燃やす」。

81. 天空と大地を創造なされた御方は似たものを創り給うことが可能でないというのか。いや、まことに主は最高の創造の主にして全知の主。

82. 本当に主のご命令とは、何かをお望みのとき、ただそれに「在れ」と言い給うこと。それで存在する。

83. ゆえに称讃あれ。その御手にあらゆるものを所有し給う御方に。そして主の御許へあなた方は帰される。・・・・・・ (第36章 77～83節)]

使徒の処に朽ちた骨を持参してきた男が「この後で生き返るのか」と訊ねたのに対して「その通り。アッラーはお前を死なせ、それからお前を蘇らせ、それから地獄の火へお前を入れる」と答えてから最終節までが降臨しました。

「77節」復活を否定する者は人間が最も弱い一滴の精液から創られたのを知らないのか。それなのに反論して実際に、朽ちた骨を持ってくる。

「79節」それを生き返らせるのは、最初に土から人間を創造した御主なのです。

「80節」水で木を生育し、緑色の樹木に果実を実らせ、枯れて乾燥させ薪として燃やします。

「81節」天空と大地を創造した御方は、最高の創造者であり全知全能です。

「82節」御主の命令とは、何かを望まれるときに、ただ「在れ」と命じるだけで直ちに「存在」が実現します。御主アッラーに称賛がありますように。復活の日に被造物の人間全員が、主の御許へ帰されるのです。

5, 「第20章：ター・ハー（全135節）」 = 啓示を正しく受け止めること

後に第2代正統カリフとなるウマルが本章に接しイスラーム入信を果たしたことで有名です。冒頭にクルアーン啓示と唯一神を讃えた後に、預言者モーセの物語につき（9～98節）まで詳細を語ります。モーセが聖なる谷で御主から声を掛けられたこと、杖や白い手などの奇跡を付与されたこと、幼児モーセを救った恩典、モーセと弟アロンのこと、モーセと魔術師達との対決、モーセと出エジプトの経緯、人々が仔牛の偶像を拜んだ大罪などが次々に展開します。このように実際に過去に起きたモーセとファラオの情報を、アッラーは預言者ムハンマドへ語り告げました。

それらの情報から学ぶべき訓戒を教えるためでした。啓示による伝達を嘘として従わない者は迷いの道へと進み最後に地獄の業火へ落とされます。反対に善事を行い、正しい信仰に沿う行為に励めば信徒（ムウミン）として報奨を受けます。このような約束を伝える啓示をアラビア語のクルアーンとして下したのです。人々が御主アッラーを畏れ、つねに思念するように義務と禁止の約束事を繰り返し説明します。クルアーンを学ぶことで、より知識を増すという有名な一節が（114節）です。

[114. 実にアッラーは真理の王者としていと高くにおられる。それでクルアーンを急いではならない、汝へその啓示が完了する以前に。そしてこう告げよ。「御主よ。知識を私に増して下さい」（第20章、114節）]

御主アッラーは他と比較できない尊く高い地位におられ、そこから降臨するクルアーンを読むときは急がないように、天使ジブリールが啓示を完了してから続けて朗読し、終わるまで待たねばなりません。それで知識が増すことになります。

以降は再度アダムのも物語となり“人間は約束をするが、それを忘れる”との繰り返しがあります。アダムに樹の実を食べないよう忠告したのに約束を忘れました。こうした訓戒と助言を最終節にかけて述べており、人間には強い意志が必要なのです。

6, 「第56章：重大事（全96節）」 = クルアーンの尊さを示す

冒頭節の「重大事（ワーキア）」から取った章名です。

- [1. 重大事が起こるとき。
2. その到来を嘘としない。
3. 落とされるもの、高められる人。
4. 大地が大揺れに揺れるとき。
5. そして山々は崩れ崩壊する。
6. また飛び散る砂埃となる。
7. そしてあなた方は三組になる。
8. まず右手の仲間たち、右手の仲間とは何なのか。
9. 次に左手の仲間たち、左手の仲間とは何なのか。
10. そして先頭の人たちとは、先頭に立つ人たち。
11. こうした人は側近の人たち。
12. 至福の楽園の中で。（第56章 1～12節）]

「重大事」とは“起こること、出来事、事件”の意味ですが、“復活の日”の別称でもあります。その重大事の復活の日が来ると人々はもう嘘と否定できません。真実となり、現世で上にいた者は地獄へ落とされ、現世で下にいた人たちが楽園に引き上げられて状況が一変します。大地が地震で大揺れに動き出し、山々は粉々に砕け飛び散り、地上の建物はすべて崩落して砂埃となります。

人々は3種類に分けられ、①楽園に行く右の仲間：現世での善い行為を記録した原簿を右手から受け取る人、②業火へ送られる左の仲間：現世での悪行を記録した原簿を左手から受け取る者、③主の側近となる使徒や教友や殉教者などの先頭に立つ人たちの3組となり、2組が天国へ、1組が地獄へ行くのです。さらに、クルアーン聖典に関して重要な記述があります。

- [75. 星々の沈む場所にかけて誓う。
- 76. そして本当にこれこそが偉大な誓い。もしそなたらが分るならば。
- 77. 本当にこれが尊いクルアーンである。
- 78. 秘め置かれた文書の中の。
- 79. 清められたひと以外はそれに触れられない。
- 80. 万有の御主からの天啓である。(第56章75～80節)]

「星々：ヌジューム」の解釈について、① 西の地平線に沈みゆく場所、② クルアーンが天から下された場所。なお、クルアーン宣誓には種類があり（1）本節のように被造物に誓うもの。（2）直接に御主アッラーに誓うもの。（3）クルアーン自体に誓うもの、です。ムハンマドに啓示されたクルアーンは、星々が旅人の行く手の方向を示すように、信徒たちへ導きの道を指し示します。尊いクルアーンは、（1）秘め置かれた文書の中に存在して、天界で保管する書板に取められています。（2）清められた清純な人以外は、聖典クルアーンに触れてはいけません。天上では清純な天使のみ、地上では身を清めた人以外は触れてはならないのです。不信者はもちろん、信徒でも身体が清浄でない場合は手に持つことを許されないのです。

こうしてクルアーンを丁重に取り扱うことはイスラーム諸国で徹底されており、意図的にそれを破り棄て、投げ捨てるのは冒瀆で厳禁です。世界でクルアーンの扱いを誤ったことから信徒たちのデモに発展した事件がメディアでしばしば報道されるのも、この章節が根拠となっています。

7, 「第26章：詩人（全227節）」＝ クルアーンの詩篇である

冒頭の文字は「ター・スィーン・ミーム（T・S・M）」で、第27章、第28章も似た神秘文字が連続しており、この3章に類似性のあることが特色です。第26章は“クルアーンの詩篇”と呼ばれます。各節を詩のように短く切り、227節ありますが全体の分量はそう多くありません。末尾に迷える詩人と信徒の詩人の比較があることで章名となりました。

[1.ター (T)・スィーン (S)・ミーム (M)。2. これこそは明瞭な聖典の文節である。]

クルアーンの文節（アーヤート）が神兆であることを冒頭に強調してから、各預言者の物語が次々と登場します。預言者モーセとファラオの物語、預言者アブラハム、預言者ノア、フー

ド、サーリフ、ロト、シュアイブの物語などです。そしてクルアーン啓示の特長について再度、確認します。

- [192. 本当にこれこそが万有の御主の下されたもの。
193. 誠実な聖霊がそれをたずさえ降りた。
194. 汝の心の上に、警告する人になるために。
195. 明瞭なアラビアの言葉にて。
196. そしてこのことは昔の民の啓典の中に存在する。
197. そして彼らにとり証拠ではないのか、それをイスラエルの子孫の学者たちも知っていること。
198. そしてもしこれを外国人の誰かに下したならば。
199. またこれを彼らに読み上げても、これにつき信じるものはいない。
.....(第 26 章 192~199 節)]

クルアーンは、万有の御主アッラーからの啓示であり、聖霊ジブリール（ガブリエル）が天上から使徒ムハンマドへもたらしました。啓示は明瞭で格調の高いアラビア語で語っています。昔の民に下された啓典類の中にクルアーンに関する記述があると指摘して、この事実はイスラームへ改宗したユダヤ人学者も良く知っていると言っています。

- [224. そして詩人たちは、唆された者だけが彼らに従う。
225. 汝は彼らを見なかったか、谷間の中で迷っているのを。
226. 本当にその者たちは自分がやらないことを口走る。
227. 信じてまた善いことを行い、またアッラーを多く唱念し、また不当を受けた後で打ち勝つ人たちは別である。それで不義の者らはやがて思い知るであろう、どんな変転で移り変わり行くかを。(第 26 章 224~227 節)

預言者ムハンマドを“占い師”と呼び、クルアーンを“詩文”と中傷することへの反論です。無明時代のアラブ人は占い師に大きく影響されていました。不信者らには悪魔が乗り移りますが、真実の預言者には決して悪魔が近づきません。悪事を行う罪深い者の上にだけ悪魔が来て、嘘を吐かせ、でたらめを捏造するのです。詩人たちの中でも悪魔に唆されて迷った者だけが従います。そうした詩人達が谷間で互いに競い合い、無駄に過ごしているのを当時は見ることができました。彼らは自分がやらないことを単に口走るだけでした。

そうでない詩人たちは信仰と善行に励み、御主アッラーを多く唱念しました。これらの詩人に、ハッサーン・ビン・サービト、アブドッラー・ビン・ラワーハ、カアブ・ビン・マーリクなどがいます。悪い詩人連中はやがて思い知るようになります。“変転”とは死後の帰り処であり、地獄へ行くことになるのです。

8、「第 27 章：蟻（全93節）」＝ 啓示は導きであり、警告でもある

2文字の構成で「ター・スィーン (T.S.)」とあるのは本章だけです。

1. ター (T)・スィーン (S)。これらはクルアーンの文節また明瞭な聖典である。
2. 導き、また吉報で信徒たちのためにある。
3. この人たちは礼拝を守り、また喜捨を差し出し、また彼らは来世につき、

彼らは固く信じる。

4. 本当にこの者らは来世を信じない。彼らの行いを我は粉飾させてやった。それで彼らは惑いさ迷う。
5. そうしたもの、この者らには天罰があり、彼らは来世での大失敗者。
6. そして本当に汝はクルアーンを英明の主にして全知の主から授けられた。

・・・・・・(第27章、1～6節)]

クルアーンが吉報とは天国への導きという意味であり、来世を信じない者には行為が粉飾され、疑義が生じて迷うことになります。このため来世に対して大きな失敗をします。次いで、聖なる谷の預言者モーセの物語となり、ダビデとソロモン（スライマーン）の物語が続いて「蟻（ナムル）」の話が出てきます。

[17. そしてスライマーンのため、ジン（妖霊）と人間と鳥の軍勢が集められて、それらは編隊にされた。

18. やがて蟻の谷に到達したときに、一匹の蟻が告げた。「さあ、蟻たちよ、自分の住みかに入り込め。スライマーンとその軍勢が気づかずにお前たちを踏み潰さないように。」

19. （スライマーンは）その言葉に面白がり微笑した。そして言った。「御主よ。わたしを励まし下さい。わたしとわたしの両親に与えられたその恩恵に感謝すること、並びにお喜びになられる善行を行うことを。そして貴方様の御慈愛で正しいしもべの中にわたしを入らせて下さい。(第27章 17～19節)]

妖霊（ジン）と人間と鳥で構成する軍勢がソロモン（スライマーン）王のために集結して編隊を組みました。軍勢は人間だけでなく、妖霊と鳥類も参加したとされます。ソロモンの軍隊が蟻の谷に到達したときに蟻が仲間たちに「軍勢に踏み潰されないように注意しろ」と警告を發しました。ソロモンはその蟻たちの会話を理解できたというのです。留意すべきは、ソロモンが鳥や動物の声を聞き分けて会話を理解しただけでなく、小さな昆虫の“声無き声”を捉えて判別できたとの箇所が論争が起きました。この解釈としては、ソロモン王が大自然の些細な動きにも注意を払い、どんな人の意見にも耳を傾けた証しだと解します。

それから、シバの女王とソロモンの物語、預言者サーリフ、預言者ロトの物語、と続きます。これら物語から、御主の唯一性の証明と復活の確信が教訓として教示されます。最終部分にクルアーンと預言者についての解説があります。

[76. 本当にこのクルアーンはイスラエル（ヤコブの別名）の子孫に対し、彼らが論争することの多くにつき語っている。

77. 本当にこれは信じる人たちへの導きと慈悲である。

78. まことに汝の御主は彼らの間を裁き給う。主は偉力の主にして全知の主。]

クルアーンは、ユダヤ人の子孫が論争している律法書と福音書の内容について多くのことを説明します。ムハンマドが生きた時代の啓典の民は、彼らの間で多くの事柄に意見の違いがあったといわれます。例えばイエスの評価、天国と地獄の状態、救世主の理解、昔の預言者たちの物語などですが、それらに関してクルアーンが降され真実を教示したのです。そして御主は

復活の日にそれら差異について正当な裁きを行うと、本章の結びで宣言しています。

- [91. わたしが命じられたことは、この土地の御主を崇めることだけ。それを聖域に
された御方。あらゆるものは主に属する。そしてわたしが命じられたのは帰依する
人であるようにとのこと。
93. そして、クルアーンを読誦すること。それで誰でも導かれたら、自らのために導いた
こと。また誰でも迷えば、こう告げよ。「わたしは警告する人でしかない。」
93. そしてこう告げよ。「あらゆる称賛はアッラーのもの。主の神兆をあなた方に示されよ
う。それで彼らはそれを知る。そして汝の主はあなた方が行うことにつき見逃されな
い。」(第27章、91～93節]

預言者ムハンマドが命じられたのは、マッカ聖域を定めた唯一神を崇めることだけでした。
関連の伝承、「マッカ解放の日に預言者は述べた。この土地はアッラーが天地を創造された日に
聖なる地とされた。それゆえこの地は、復活の日まで神聖なのである。木を伐採してはならず、
狩猟も許されず、血の一滴も流してはならない」。そして、唯一神アッラーのみに帰依する人
(ムスリム)となることでした。人々へクルアーンを読誦することで、導かれる人は自分自身
を導いたのであり、迷う者には“使徒が警告者である”と告げることでした。御主アッラーは神兆
の啓示を通して正しい道を教示するだけであり、その選択は、各個人に任されるのです。